

論文

江戸の Urbanism

—寺門静軒『江戸繁昌記』と成島柳北『柳橋新誌』の社会学的考察—

内藤辰美

Urbanism in the Age of Edo

— Sociological Considerations on the Literary Work of SEIKEN TERAKADO and RYUHOKU NARUSHIMA —

Tatsumi Naito

本論は寺門静軒『江戸繁昌記』と成島柳北『柳橋新誌』を通じた江戸のアーバニズムの考察である。江戸の成長は新しい社会階層と生活様式を生みだした。静軒と柳北はそうした江戸とそれを映す柳橋という場所に就いて記述する。この論文でアーバニズムの本質を明らかにしながら、アーバニズムと現代についても考えてみたい。

キーワード：江戸、アーバニズム、静軒と柳北、ワース、ゾンバルト

問題の所在

都市小説は都市の生活様式や、都市独特の典型的人間像を描くところに特徴がある（Blanche Houseman Gelfant, 1954 = 岩本巖訳 1977）。小論は寺門静軒『江戸繁昌記』と成島柳北『柳橋新誌』を通じた江戸と江戸のアーバニズムに関する考察である。

アーバニズムは論争的なテーマである。アーバニズムをインダストリアリズムやキャピタリズムに随伴する現象とみる見方もあるし、それらとは峻別してとらえられるべき概念だとみる見方もある。後者の例としてよく知られるのは社会学者ワース（L. Wirth）の見解である。「大切なのは、アーバニズムを産業主義（industrialism）や近代資本主義（modern capitalism）と混同する危険に注意することである。近代における都市は、たしかに、近代の電力機械技術、大量生産、資本主義的企業とは別箇に発生したのではない。しかし、

前近代の都市が前産業的・前資本主義的秩序のもとに発達した点で今日の大都市とはちがっているものの、それでも都市にはちがいないのである」（L. Wirth 1938 = 高橋勇悦訳 1978, 132 ~ 133）。アーバニズムに対するワースの関心は「大量の異質な諸個人の、相対的に永続的な、密度のある集落に典型的に現れる社会的行為および社会的組織の諸形態を発見することにあつた」（L. Wirth 同上, 134 ~ 135）。

もちろん、アーバニズムを扱った社会学者はワースだけではない。ゾンバルトもアーバニズムを論じた一人である。「奢侈の発展にとって意義深いことは、大都市が、はなやかな生活を送る新しい可能性、それとともに奢侈の新形式をつくったことである。従来は王侯の宮殿内で宮仕えする人々だけが祝った祝祭が、大都市ができたおかげで広く住民層にもひろがり、彼らは、自分たちが規則的に享楽にふけることができるような場所を

つくりだした。・・・その頃すでに完成された域に達しようとはじめていた根本的変革のありさまが、ものもみごとに反映されている。根本的変革とは、厳密に個人的に贅沢にふけることの代わりに、一種の集団的贅沢が形成されてきたことである。もともとは国民経済の次の時期に入って初めて開始される生活方式の共同化が、この分野ではすでにはじまっていたわけだ」(Werner Sombart 1922= 金森誠也訳 2012、221～229)。ここでは、ゾンバルトの、大都市が従来は王侯の宮殿内で宮仕えする人々だけが祝った祝祭を広く住民層(上流・中上流の人、そしてやがて庶民)にも開放し、自分たちが規則的に享楽にふけることができるような場所をつくりだしたということ、すなわち、個人的に贅沢にふけることの代わりに、一種の集団的贅沢が形成される契機を用意したことだという指摘に注目しよう。

1. 『江戸繁昌記』と『柳橋新誌』の江戸 —拡大と成熟—

江戸期は都市が著しい成長を遂げ、アーバニズム＝都市的生活様式が生成・発展した時期である。寺門静軒『江戸繁昌記』と成島柳北『柳橋新誌』には江戸のアーバニズムと成長する江戸の一角に新しく生まれた柳橋の様子が描かれている。

寺門静軒(1796年寛政8年生。『江戸繁昌記』1832年天保3初編出版、1841年天保13年『江戸繁昌記』青桜の巻成立)。静軒は水戸の人寺門勝春の次子として生まれた。天保三年より『江戸繁昌記』を刊刻し、六、七年に至って全部五編をだした。天保八年『江戸繁昌期』のために罰せられ江戸市中に居住することを禁じられたので、髪を剃って武州秩父辺より上毛の間を流浪し知人の家に泊り歩いていた。「静軒はかくの如く^{やくきゅう}厄窮流難の一生を送ったが、異腹の兄の零落するのを見てはこれを扶助し、友人の子孫^{りんらく}の淪落するものにも

またその護る所の金を与えたという。静軒は滑稽^{こっけい}諧謔^{かいぎやく}の才或に任せ^{やや}動もすれば好んで淫猥の文字を弄だが、しかしその論文には学識^{こうしき}頗る治博なるを知らしむるもの鮮^{すくな}からず、またその詩賦には風韻極めて誦すべきものが多い」(永井荷風 2000、101～102)。「『江戸繁昌記』における静軒は、天保の改革前夜の江戸の文化の爛熟が、裏側に諸々の暗黒と腐敗を含むことを厳しく指摘しながらも、望ましくない現象について「繁栄の地、勢い然らざるを得ず」「繁栄の地方の自ら然る所」といったいい方をすることも度々で、腐敗を含まずして繁華はありえないということを認めるかのごとくである。静軒のこうした物の見方は、『江戸繁昌記』を読み解く上で一つの鍵になるものであった」(日野龍夫 1989、575)。

成島柳北(1837天保8生。1859年安政6『柳橋新誌』初編成稿、1874年明治7『柳橋新誌』二編刊行)。「柳北は嘉永六年冬十七歳の時父を失ひ家を継、幕府實録編集の傍、將軍家茂に讀書を授けた。安政六年二十三歳九月より『柳橋新誌』を草し、冬成り、更に翌萬延元年七月増補した。この歳祖父及び父の編する『徳川實記五百余巻』後鑑』三百七十餘巻を訂正し、幕府に上がって黄金及び字時服を賜った。文久三年時勢を慨し、一詩を賦して老中の怒りにあひ辞任して家に退いた。・・・しかし、時勢は彼の安居を許さず四年正月將軍慶喜は彼を外国奉行に任じ、次いで會計副総裁、且つ參政の班に列せしめたが、此の歳幕勢地に墜ち、慶喜職を辞するに及んで、柳北又致仕し、家を義子信包に譲り、向島に一字を設けて我楽多堂と名付けて家族を住はしめた。・・・『柳橋新誌』二編は此の間即ち明治四年三月に^{かくひつ}擱筆されたものである」(成島柳北 2001、95～96)。

静軒と柳北二人の関係である。『柳橋新誌』の體裁はその自序にあきらかなように、寺門静軒の『江戸繁昌記』を模したものである(成島柳北 同

上、94)。当然、柳北は静軒をよく読んでいた。「往日、静軒居士なる者あり。江戸繁昌記を著す。備に八百八街の景状を模し、勝場劇区、載せざる所なく、説かざる所なし。其の文極めて誠謹にして、其の事は則ち明祥。詠む者をして、臥して其の地のある所を知らしむ」（成島柳北 同上、9）。

静軒と柳北の背景には都市化する江戸があった。江戸への人口集中は後期になるほど激しくなった。そしてそれまでにない問題も生まれた。「富農と貧農との差が甚だしくなった農村では一年に一兩の金を残すことも困難であった。言葉通りの水飲み百姓であった。それなのに江戸では働き盛りの男ならば、衣食を供給されて、少なくとも年四回の給金が与えられる。これは農村青年にとって少なからざる誘惑であった。江戸に出稼ぎに出ることは容易に許されなかったから、彼らの多くは出帆した。その結果無宿となって江戸の町中に紛れ込むことになる。・・・彼らの大部分は都会悪に染み、放浪してその生涯を終わることを常とした。そればかりでなくそれが又江戸における犯罪その他の禍根ともなった」（野村兼太郎 1966、119）。

江戸期、特に、元禄以降は商品経済が発達し、都市化が顕著であった。『江戸繁昌記』と『柳橋新誌』を生んだのはそのような江戸であった。吉田伸之によれば、成熟する江戸の背景には新しい社会的権力（周辺の地域社会に対して私的な支配力を及ぼす社会層）の台頭があった（吉田伸之 2009）。江戸の拡大とそこに生起する現象については荻生徂徠の指摘もある。「江戸の広き年々に広まりゆき、たれゆるすともなく、奉公御役人にも一人と目をつけ心づく人もなくて、いつの間にか、北は千寿、南は品川まで家続きになりたる也。都鄙の境なき時は、農民次第に商売に変じてゆき、国貧になるもの也。農民変じて商人となることは、

国政の上には古より大いに嫌うことにて、大切の事也」（荻生徂徠 2008、14）。荷風も指摘した。「御城下の町人は、町々に人別帳あれども、店を逐立、また自分よりも店替える事自由也。元来他国よりもあつまるものにて、親類も御当地になく、根本来歴を誰も知らぬもの也。さて奉公人は皆田舎より新たに^{うけにん}出たるにて、^{うけにん}請人とは元来より^{ひとぬし}の知人にてななきに請に立つ事也。それゆえ人主を立つれども、人主また住処を定めず」（永井荷風 2000、18～19）。

2. 大都市江戸の新興勢力と江戸市民の生活様式 —『江戸繁昌記』と『柳橋新誌』—

江戸の拡大と円熟は新しい社会階層と勢力の台頭を促し、町人を中心に新しい生活様式を生み出した。札差はその象徴である。「関八州及び伊豆・駿河の天領の貢租米は駿洲清水及び駿府の御囲米除いて、大部分は江戸浅草の御蔵に送られて来る。蔵は漸次に増設され、51棟、258戸前で、隅田川に面して建てられ、船着のために堀が作られ、一番堀から八番堀までであった。当時の運輸機関は主として船舶であり、殊に貢租米は船舶に依存した。駿河、伊豆は勿論、上総、下総の一部、安房、武蔵の一部、相模等は海上を運ばれ、他は河川を利用した。荒川（隅田川）はいうまでもなく、利根川、烏川、渡良瀬川、佐野川、宇津間川、黒川、鬼怒川、小見川、江戸川等に河岸が設けられ、そこから川堀を伝って浅草御蔵まで運ばれたのである。・・・蔵入米が不足していたし、かつ早期に渡すことが必要であったから、米の代わりに金銀を渡すことがあった。又一部金、一部米で渡すこともあった。その場合米の直段がその時の直段を決定し左右するほど有力なものであった。・・・この蔵米を請取るためには、自身または家来を浅草の蔵役所に差出さなければならない。御蔵役所では請取本人の名前、米員数を小切手に認め、こ

れを丸めて多数一緒に^こ筥に入れて、漸次に振り落とす。このことを玉入という。その日渡し得る米の員数まで落としていく。落ちた手形の者に対して請取方を通達するのであるが、相当の時間がかかる。従って渡し日には多数の者が蔵前に集る。これらの人々のために腰掛を出し茶湯などを供したのが札差の始まりである。このことは時間潰しであり、又いかにも面倒であったから、間もなくその者達を代理人として請取らせるようになった。札差という名称は代理人として請取った米俵を店先に積んで置き、その俵に、札旦那、すなわち依頼者の姓名を記した札を差して置いたことから生じたものであるといわれている。・・・札差が有名になったのはその本業たる代理人としての収入ではなく、金融機関としての高利貸にあった」(野村兼太郎 1966、127～133)。

札差の存在は幕藩体制がその内部に新しい階層・勢力を台頭させていたことを示すものである。「旗本は俸禄の米を抵当に入れて貧乏になる。一方札差は金が溜まる。そこで贅沢をする。通を張るといことになる。当時有名なる十大大通じゅうだいたいとうのなかにも大口晩雨の如きは芝居において殊によく知られていた。旗本の困窮の結果遂に寛政の改革においていわゆる棄捐きえんの令が発せられた。これは鎌倉時代における徳政の令と同じで武士を保護するための令である。すなわち六年以前の証券はすべてこれを切り棄てて六年以内のものは利子を低くして年賦をもって返させることにした」(辻善之助 2009、259～261)。

江戸の人口増は、社会問題＝無宿ものを生み出した。「人足寄場は、江戸後期における無宿者急増という社会問題を解決すべく、幕府の政権担当者が悩みつけてきた対策として実現せられたものである。幕藩体制は、一面において、人民を土地に定着せしめ、その労力と地力によって生産される米麦を以って幕藩の財用に充てる組織という

ことができよう。そのために人別帳と水帳(土地を把握するためのもの)があった。ところが八代将軍吉宗の時代から、人別帳からはみ出した無宿なるものが段々増加し、これらは都会に集り、食い詰めた揚句、罪を犯すことになる。これは、幕藩体制の基礎を危うくすることを意味する。すなわち、幕府当事者は無宿問題に取り組まざるを得ない。そこでかかる無宿を一定の地域内に追い込み、犯罪の発生を予防するとともに、彼らを教育して生産技術を身につけさせ、生産人口として元の人別帳に返すことが考えられた。かくして、安永年中、勘定奉行石谷清昌は江戸に集った無宿人を捕え、これを水替人足として佐渡の鉱山に送る制度を始め、天明年中には、南町奉行牧野大隅守成賢が「無宿養育所」を建議し、自ら経営したのである」(瀧川政次郎 1994、105～106)。

江戸の社会問題は無宿ものにとどまらない。目立ったのは風俗の悪化や犯罪の増加である。「大勢の武家城下町にあつまり居る故、火災もしげく、その上常の住居なる故、妻子足手まといになり、財宝に心引かれ、火を消す事もならず。町人の風俗と傾成町・野郎町の風俗も武家へ移り、風俗悪しくなる。また不断御城下にありてなれこになる故、公儀をも鷄呑みにして、上を怖るる心も薄く、行儀を嗜みすれば公家・上臈じょうろうのようになり、行儀に構わざる時は町奴のようになる」(荻生徂徠 2008、70)。「少しもよき町人は、衣服・食事・家居・器物まで、金さえあれば大名と同事にて、誰制する者もなし。これ諸物を用ゆる人多き故に、諸色の高直なる事もっとも也。これのみにあらず。田舎者も江戸の御城下を見習いて、これまた金次第也。何事も江戸の町人に負けじ劣らじと^{おこり}侈をする事に今はなりたり。武家の数と町人・百姓の数とを比量して見れば、町人・百姓の人数は武家の百総倍なるべし。その人どもに制度無きゆえ、いずれも金次第にてよき物を用ゆる事になる也。

・・・また都も田舎も武家みな旅宿にて、金にて物を買いととのえて、用を弁せんとする故に、商人の勢い盛んになりて、日本国中の商人の勢い盛んになりて、日本国中の商人に通じて一枚となり、物の直段も遠国と御城下とつり合いて居る故、数百万人の商人一枚になりたる勢いには勝たれぬ事にて、何程御城下にて御下知ありても物の直段下がらぬ筋もあり。また物の出所、遠国より江戸まで参る間にては、段々幾次も次たる処々にて皆それぞれに利を儲けて除く事、道中の賃金の外なる故、かかり莫大になりて、物の直段高直なる筋もあり」(荻生徂徠 同上、130～131)。「総じて百姓の奢り盛んになるより、農業を厭、商人となる事、近来盛んになりて、田舎殊の外衰微す。これにより博突・盗賊等やむ事なし。人殺し等のある時も、その所に奉行なき故、江戸へ注進する内に、日数延びては詮議もならぬ事になる」(荻生徂徠 同上、193)。

前置きが長くなった。寺門静軒と成島柳北である。寺門静軒の『江戸繁昌記』には、江戸人の生活様式、娯楽、風俗が仔細に描かれている。相撲、娼家、歌舞伎、千人会、金竜山浅草寺、楊花、両国の煙火、売ト先生、書画会、火場、賽日、女剃師、富沢坊、山鯨、煨薯、日本橋魚市、上野(一篇)、混堂、葬礼、神命、饅頭舗、墨水の桜花、街興(二篇)、開帳、祇園会、外宅、永代橋、書舗、愛宕、寄、裏店(三篇)、仮宅、画島、学校、新梅園、馬喰街客舎、麴町、市谷八幡(四篇)、千住、品川、深川、本所、演武場、茶店、二十五絃、鳶烏雀犬鶴(第五篇)が取り上げられていて、江戸の人びとの多彩な暮らしが幅広く記述されている。その一つ一つに静軒の観察がなされていて、江戸の社会と人びとの生活に対する静軒の鋭い視線がある。

少し立入る。静軒は『江戸繁盛期』を相撲の記述から始めている。相撲は江戸の人びとに受け入

られた娯楽の筆頭といえるものであった。「江戸繁華の中、太平を鳴らすの具、二時の相撲、三時の演劇、五街の妓楼に過ぐるはなし。相撲は則ち戯に属すると雖ども、蓋し古人武を尚ぶの由つて起こされる所、其の来たること旧し」(日野龍夫 1989、5)。相撲人気は人びとの朝早起きをも苦にさせなかったようである。「櫓鼓、寅の時に枹を揚げ、連撃して辰に達す。観る者、蓐食して往く。力士、対を取つて場に上る。東西、各々其方よりす。皆長身大腹、筋骨鉄の如し。真に是二王屹立す。目を努り臂を張り、土豚を中分し、各々一半を占めて蹲る。気を蓄ふること之を久いうし、精已に定まる。一喝、身を起こし、鉄臂、石拳、手々相搏つ。雲を破つて電掣めき、風に碎けて花ひるがえる。虚を売つて気を奪ひ隙を搶いて価値を取る。・・・行司人、軍扇を乗り、左周右宣、羸輸を判ず」(日野龍夫 同上、6)。江戸期に於ける相撲人気は高く、勸進相撲もさかんであった。「今の世に謂はゆる勸進相撲は、後光明帝の正保二年、山洲光福寺の僧、宮殿再建によつて、此の技場を設くるに起こる。江戸は則是より先、明石志賀之助なる者、命を乞ひ、始めて之を四谷の塩街に行う。実に寛永元年なり。後、寛文元年、創めて勸進相撲を建て、歳時愛続き、繁昌否に臻ると云ふ」(日野龍夫 同上、7)。

相撲以上に江戸を賑やかにしたのは遊里の存在であり遊女たちであった。遊里と遊女は江戸の繁栄とともにその数を増していた。「慶長の初年、娼家僅かに三所。一は麴町に在り、京師六条より移れるもの。一は鎌倉河岸に在り。一は大橋に在り今の常盤橋、是なり。其の他、伏見の夷街・奈良の木辻坊より来たる者、各所に散居す。十七年、庄司甚右衛門なる者、上書して、散を合して一と為し、以て一大花街を開かんことを請ふ。元和三年、官始めてその乞を准し、一地方を今の葺屋坊の傍に賜ふ。開闢、功成る。其の蘆を鞭うち簀を

覆へすの故を以て、名付けて芦原と曰ふ、後、吉原に改む。而して大橋より移り住する者、江都の繁華に係るの意を取り、改めて江戸坊と曰ふ初め柳坊と名づく、鎌倉河岸より来る者、其の第二坊に住す。麴町よりする者、初め京師より到るに縁^よって京坊と曰ふ。その後来る者、其の第二坊に在り。あるいは之を新坊^{しんまち}と謂ふ。後、明暦三年八月、命に因って今の地に徙る。角坊は旧名にして、堺・伏見の二坊は、其の地方より来る者多きに由るの名と云う。五街の桜館、互ひに華麗を競ひ、三千の娼妓、各々嬋妍^{せんけん}を闘はす。一廓の繁華、日に月に盛昌なり」(日野龍夫 同上、8～9)。

静軒は世相の変化も見逃がさない。たとえば新しく登場した女剃師である。女は自分で髪を結うべきものとされていたが、安永の頃から女性を対象とする髪結いが現れた。「女祖師は、梳粧^{ししょうそたん}素淡、単衣を綱し、巾箱を抱き、急遽^{きゅうきょ}履を飛ばして、東西奔走せざるはなし。予尚ほ幼なり。今より廿年前の世、此の女業ありと雖ども、寡^{すく}なくして、その賃も甚だ貴し。賤しきも五十銭に下らず」(日野龍夫 同上、45)。食の変化にも目をつける。「凡そ肉は葱に宜し。一客一鍋。火盆を連ねて供具す。大戸は酒を以てし、小戸は飯を以てす。火活して肉沸く。漸く佳境に入る。正に是れ焚^{はん}喰^{くわい}肉を食りて死も亦辞せず、花和尚^{くわおしょう}醉^{すい}へり。争論大いに起こる。鍋の値約ね三等あり。小なる者は五十銭、中にして百銭、大は則ち二百。・・・其の獣は則ち猪・鹿・狐・兎・水狗^{みずいぬ}・毛狗^{けいぬ}・路^{かみ}・九尾等の物、倚^い疊^{たか}してあり。・・・聞く、天武帝の四年、天下に令して始めて獸食^{じゅうじき}を禁ず。病に餌^{くら}ふにあらざるよりは、輒^{たやす}く噉^{くら}ふことを許さず。世因って謂ひて薬食ひと曰ふ。前日江都中、薬食舗^{やくじき}する者纒^{むす}かか一所、麴町の某の店、是れのみ。計るに二十年來、此の薬の行なわるるや、此の店今復算^{また}数すべからざるに至る。招牌^{かんばん}、例して落楓紅葉^{らくふうこうよう}を画き、題するに山鯨の二字を以てす。薬食ひに係ると雖

ども、猶国禁を避く。作為の為す所、蓋し隱語のみ。都人^{あざな}字^{らバケ}して魍魎^{わうりやう}と曰ふ」(日野龍夫 同上、49～50)。

このように詳細な記述が、娼家、歌舞伎と多数の項目にわたり展開されていく。それは江戸民の暮らしや江戸という都市の性格を知る上で貴重な観察記録で、江戸の人びとの暮らしと生活文化とを伝える江戸案内でもあった。こうした静軒の観察は、江戸に生起している新しい生活様式＝アーバニズムを、<力まずさりげなく、時には皮肉を込めて>書きとどめている。ある意味で静軒はアーバニズムを全面的に許容していない。『江戸繁昌記』を通読するとき、強く印象づけられるのは、素直な江戸賛歌の章がいくつか含まれてはいても、やはり静軒の憤りである。その一例は江戸の繁華をその一方の寒郷僻地の貧しさと比べ江戸人の歡樂の奢侈を嘆いているところにみることができる(日野龍夫 同上、588)。静軒は、江戸の繁昌とその帰結であるアーバニズムを一面でこの大都市の輝かしい歴史と見ながら、この大都市が、多くの問題をかかえていて、矛盾に満ちたものであることも見抜いていた。また、アーバニズムが悪徳に力を貸していたことも認めていた。そしてそれを大都市江戸の持つ表と裏の顔として観察した。円熟する江戸は発展の象徴的事象—「遊びの形」を生み出していく。娼家・遊里はその一つであった。「静軒が『江戸繁昌記』を執筆していた時期の江戸が、幕府が蓮年窮民に施米せざるを得ないような深刻な窮乏に追い込まれながらも(全国的に同様の状況で、大阪で大塩の乱が起こるのは天保八年のことである)、為水春水の梅暦シリーズや『江戸名所図会』といった、飢餓や不況や社会不安の影をまったく反映しない、江戸の太平を信頼し切った書物の典型的なものを次々出現させるという、矛盾に満ちた(繁昌)のもとにあったことが知られる。その繁昌を丸ごと書き綴ろうと

というのが、静軒の意図であった。初編序に、天保二年五月、病余のつれづれに、自分のような「窮^{きつう}巷^{かやう}擁^あ痾^あの浪人」が餓えもせず生きてゆけるのも天下太平のお蔭であるということに感じ、江戸の繫昌を、種々相を書き記そうと思い立ったとある。『江戸繫昌記』にはこの言葉を額面通りに受け取ってよい側面が確かにある。初編でいえば、「吉原」「劇場」「金竜山浅草寺」「両国の煙科火」などの章は、毒をほとんど含まない素直な江戸賛歌であるし、「千人会」「山鯨」などの章は、儒者や医者への批判に筆が及んでいるにしても、直接の素材である富くじや獣肉店が批判されているわけではない。静軒が江戸の風物や年中行事に対してかねて深い愛情と旺盛な好奇心を抱いていたこと、この機会にそれらを網羅的に記録しよう一念発起したことは、疑いない」（日野龍夫 同上、587～588）。

しかし、静軒は江戸に生起している新しい生活様式＝アーバニズム、円熟する江戸が発展の象徴として生み出した新しい「遊びの形」を、皮肉を込めながら書きとどめているのも事実である。そうした静軒の社会意識はどこから出たものであろうか。彼の生い立ちも一つの要因と考えられている。「早くに両親に別れ、祖父母に育てられた静軒は、放蕩無頼の青少年期を過ごした。当然この間に、江戸の繁華を、その退廃した部分を込めて、享受したことであろう。『江戸繫昌記』における静軒は、天保の改革前夜の江戸の文化の爛熟が、裏側に諸々の暗黒と腐敗を含むことを厳しく指弾しながらも、腐敗を含まずして繁華はあり得ないということを認めるかのごとくである。静軒のこうした物の見方は、『江戸繫昌記』を読み解く上で一つの鍵になるものであるが、それは早く青少年期の体験に胚胎するものであった」（日野龍夫 同上、575）。

静軒から柳北に目を転じてみよう。幕末柳橋の

花街を描いた柳北の『柳橋新誌』初編と、文明開化の波に洗われる〈東京〉の柳橋を観察した『柳橋新誌』二編が伝えるのは、柳橋という花街のすがたであり、花街のすがたを通した江戸から東京に至る大きな変化と変化に押し流される社会と人びとの生き方である。寺門静軒が生まれたのは1796年、成島柳北の誕生は1837年であるから、出生において約40年時間の遅れがある。「成島柳北は徳川の儒官であり、祖を遠く新羅三郎義光に発し、後甲斐国成島村に土着し、徳川時代に至って江戸に出て幕府に仕え、元文年間成島錦江が奥儒者となるに至って爾後代々將軍の侍講となった。祖父司直（號東岳）父稼堂も有名な儒者である。柳北は天保八年二月に生まれ、嘉永六年冬十七歳の時父を失ひ家を継ぎ、幕府實録編修の傍ら、將軍家茂に読書を授けた。安政六年二十三歳九月より『柳橋新誌』を草し、冬成り、更に翌萬延元年七月増補した」（成島柳北 2001、95）。『柳橋新誌』初編は、柳北の人生のごく早い時期、安政六年（1859）から翌萬延元年に欠けて（23歳～24歳）執筆された。柳北は安政四年頃から柳橋の花街に出入りするようになり、初編巻末に付された柳河春三の戯文によれば、遊蕩に二千両の大金を費やしたという。船宿・料理屋・芸者から成る柳橋お遊びの世界の実相を詳細に穿つ本書は遊蕩の報告書といった趣がある。二千両というのが事実かどうかは分からないが、柳北が柳橋にかなり深入りしていたことは本書の記述が裏付ける」（日野龍夫 1989、600～601）。「柳北の遊びの流儀は、料亭から船宿へ、船宿から歌奴の家へというように、外郭から本城へ迫るおもむきがあったが、『柳橋新誌』初編も、柳橋の水運の便と両国橋界隈の雑踏に筆を起し、船宿・料亭の概況から歌奴の生態に及ぶ求心的な構成が選ばれる。船宿や料亭はいうまでもなく、柳橋の繫昌いっさいをもたらした陰の力が、一夕の飲體を売

る歌奴の群れに外ならないという直截な認識から柳北は柳橋の風俗を語りはじめるのである」(前田愛 1976、102)。

柳橋の花街に出入りし、遊蕩に二千両の大金を費やしたといわれる柳北であるが、しかし、柳北はただ柳橋に入れ込んでいただけではない。その筆によって柳橋の繁栄の醜悪な裏面をあますところなく暴露するのである(日野龍夫 同上、602～603)。

以上のように、柳北は柳橋花街の風俗およびその推移隆替を捕えたが、『柳橋新誌』の初編と二編との間には維新の大変動を受け異なった見方がある。「初編は柳橋の風趣情態を叙したもので、二編も同じく柳橋事情を寫したものであるが、初編が少々案内記めくに対して二編はその風趣を描いて裏面に嘲世罵俗の意を寓してゐると認められ、『柳橋新誌』全体の価値も、この第二編に存すると云つても失當ではない。初編は柳北 23 歳の作であるが、二編は 35 歳の時に成ったもので、作者はこの間に幕府倒壊といふ大きな運命悲劇を経験しているばかりでなく、年齢的にも老成して、その観察が現実的歴史的になってきた。この事が、歳二編の内容をして前編より著しく多角的且つ思想的にせしめたのである」(成島柳北 2001、93)。塩田良平は指摘する。「本書を通読してみると、風刺や滑稽や時に淫佚の分子いんいつもみられなくはない。又篇中、作者の拉し来るの人物は主として痴遇の男女であるが、これは作者が醜を描いて欲ばんとするが為ではないことを読者は知るべきである。由来人情の反覆、世代の交替の激しきこと、花街に如くものはなく、且つ又維新の大変動を受け、落花狼藉の地たらしめられた處、この柳橋に如く者は無きが故に、彼の詩情は此處こゝに奔り、ここに流離の精神を発見して、一篇の風俗詩を点描し得るに至つたと認むるべきである。さういふ風に見て来ると本書は、柳橋という狭斜の巷を通じ

て、新文明の成長的な野蛮さと新時代の破壊的非伝統主義と哭してゐる保守主義者の、一種「スケッチブック」であると認められるのである。・・・新時代の為に蹂躪された廢墟に立って舊時代の遺珠を拾ふは、時代から置きざられたものの有する感傷ではあろうけれども、さういふ感傷の中に、作者柳北は流石に江戸子らしく、新しき者の持つ暴力に都会人的反撥を感じて之に揶揄を加へたのである。そこに本書の過渡時代文學たる所以のものが存するのである」(成島柳北 同上、93～94)。

幕府の崩壊と新政府。『柳橋新誌』二編の焦点は、江戸幕府の崩壊から維新政府の樹立へという移行にある。明治四年成立の『柳橋新誌』二編は、「新政府に出仕せず、旧幕府の遺臣という姿勢を貫き通す柳北が、文明開化の波に洗われる<東京>の柳橋を観察した書である。新政府の吏員を始めとする新しい柳橋の客たちは、それぞれに文明開化の浅薄さ、皮相さを体現している。彼らを次々と戯画化しながら、柳北は<江戸>の柳橋と、この地とともにあった自らの青春と、二つの失われてしまったものを追憶するのである」(日野龍夫 1989、334)。正に、「二編は、柳北が無用の人の自覚のもとに、維新後の柳橋の変貌ぶりを観察し、この地に才子佳人の夢を逐うた青春時代を回顧した書であった。作品は、様々な人物の登場する短いエピソードの主役の多くは遊客である。初編が芸者・船宿・料理屋についての記述に終始して、客にはほとんど筆を及ぼさなかったのと比べて、客に対して強い関心を向けているのが、二編の大きな特徴である。客に関心を向けるのは柳橋の変貌とはすなわち客の変貌だったからである。柳北の目に映じた当代の柳橋は、徳川の世をしのぐ繁栄を見せている。その繁栄をもたらしたのは、新政府の官吏を始めとする、文明開化の<東京>の客たちであった。かつて<江戸>の

遊客媚を呈した柳橋が、まさに相手を選ばぬ娼婦のごとく、いまや<東京>の遊客に腰を屈して恥じないさまは、徳川の遺臣の柳北として、白けた思いなしには眺められないものであった」(日野龍夫 同上、608)。「しかし、風流を解さない客によって柳橋が墮落させられるというのは、事新しい話ではあるまい。前述のように、初編において柳北はすでにその趣旨のことを述べていた。柳橋の芸者は、<東京>の客によって初めて墮落させられたのではなく、<江戸>の客によって十分墮落せられていたはずである。・・・柳北はむしろそのことを承知している。しかし、<東京>の客への反発の前に、<江戸>の柳橋は美化されざるを得ない。薩長の田舎者を主体とする<東京>の客が文明開化を代表するのに対応して、柳橋は三百年の江戸文化の代表の役割を負わされたのである。<東京>の客が柳橋で我が物顔に振る舞うさまに、粗野な文明開化の波が江戸文化の粋を蹂躪しつつある世相の縮図を見出して、憤りを禁じ得なかった。その憤りを、「無用の人」の分をわきまえて、戯文によっていささか晴らそうかというのが『柳橋新記』二編の基調であった」(日野龍夫 同上、609)。

ところで、前田愛によれば、静軒の『江戸繁昌記』と柳北の『柳橋新誌』には同じく風俗誌ながらその風俗のとらえ方が微妙にことなっているという。柳橋の花街に観察を局限した『柳橋新誌』は、江戸の人情世態の惣まくりと言ってもいい『江戸繁昌記』にみるような猥雑な豊饒さを持ち合わせていないのである(前田愛 1976、101)。

「往日、静軒居士なる者あり。江戸繁昌期を著はす。備に八百八街の景状を模し、勝場劇区、載せざる所なく、説かざる所なし。其の文極めて詼諧にして、其の事は則明祥。読むものをして、臥して其の地のある所を知らしむ。・・・然れども其の今を距ること二十年に過ぎ、物換り俗移り、

地の熱鬧玲策^{ねつどうれいさく}、相変ずる者少なしとせず。往時、新地、深川の妓院、綺羅叢をなす者、今は乃ち索然として踪なく、神明・芳坊^{カゲマミセ}の變童肆、娼楼と相抗する者も、亦寥乎^{れうこ}して影を斂む。・・・然れども此の大都會の繁華^{いづくんぞ}、^カ其の地を掃って尽くすべけん。古への微かにして今の盛んある者も亦あり。柳橋是なり。柳橋は何によって然る。深川の廢するに因るなり」(日野龍夫 1989、337～338)。

その柳橋の位置と様子である。「夫れ柳橋の地は乃ち神田川の咽喉なり。而して両国橋と相距る、僅かに数十弓のみ。故に江都舟楫の利、この地を以て第一と為して、遊舫・飛舸最も多しと為す。其の南、日本橋・八丁渠・芝浦・品川に赴く者、北、浅草・千住・墨陀・橋場に向かう者、東は則ち本所・深川・柳島・亀井戸の往来、西は則ち下谷・本郷・牛籠^{しやうし}・番街の出入、皆此を過ぎざる者なく、五街の娼肆に遊び、三場の演劇を觀、及び探花・泛月・納涼・賞雪の客も、亦皆水路を此に取る。・・・船商の家、俗に稱して船宿と曰ふ。船宿の斯の地に住する者、四区に分つ。一は則ち橋の東岸及び南路に在る者。曰く丹波、曰く上総、曰く日野、曰く伊豆、曰く升田、曰く尾本、曰く吉川、曰く藤本、曰く飯村、曰く若竹、曰く新上総、曰く山田、曰く竹屋。之を柳橋の表街と謂ふ。一は則ち橋の西岸に在る者。曰く信濃、曰く崎玉、曰く三浦、曰く相撲、曰く福吉、曰く新若竹、これを柳橋の裏岸といふ。一は則ち橋の東南、米沢街にある者。曰く福吉、三浦、播磨、相模、長島。之を米沢の表街といふ。一は則ち其の南、故柳橋の側に在る者。曰く伊勢、鈴木、海老、芳野、桔梗、二見、尾張、柏屋。之を米沢の裏岸と謂ふ。又故柳橋岸と稱す。此の四区を土俗号して四岸と曰ふ。合わせて三十三戸。伝へ稱す、米沢街の地、往昔津あり。今の船宿は、みな当時、津を護る者。業を継こと、年あり。而して松吉・大黒二家は、

近歳産傾いて去り、始めて旧員を欠く。而して柳橋裏岸の福吉は、即ち松吉に代わって業を開く者と云う。四岸の相結ぶや、親戚の如く然り。患難相援け、吉凶相問ふ。もし二岸争いあれば、二岸之を解く。一岸曲あれば、三岸之を譲む。故に舟子の姦を為して一岸之を遂ふ者は、三岸も亦之を拒む。而して橋北の藤岡・桐谷の如き者は、其の盟に与らざるなり」(日野龍夫 同上、339～343)。「船宿の家たる、貧富冷熱の異なるあれども、而も大抵伯仲す。……而して土家舟を造って諸れを船宿に託す者あり。之を邸船と謂ふ。其の艚、条鉄を挿み、以て識となす。……遊舫いうほうの最も大なる者、俗に之を屋形と曰ふ。稍小なる者、之を汁翻シルコボンと謂ふ。各々其の名を扁して某丸と曰ふ。是は則ち定業の家にあざれば、造ること能わず。小松屋の小出丸、明石屋の岩戸丸の若き者、大都内僅かに七艘あるのみ。……但輕舸ただちよきは、則ち夜たけなわ關には意急に、疾く山谷溝に赴くの客、以て街興の脚に換ふべき者。任舟は、則ち暮春潮退き、蛤を品江に撈る日、亦以て屋船の役を扶くべき者。共に廃すべからざるなり。……客の船宿に来る者、其の趣一ならず。事あって舟を傭ふ者あり。乗って娼郭・劇場に遊ぶ者あり。仮りて碁する者、博する者、眠る者、話する者あり。妓を招き酒を呼ぶ者あり。而して、船宿の貴む所の者は、則ち妓客のみ。……名は則ち船宿にして、其の妓を以て業と為し、客の妓と偕に宿することを許す者あり。之を呼んで妓宿と謂うも亦可ならん。聞く。深川の盛んなりしや、船宿の客を誘ふ、芳原の引手茶屋と称する者おもむと到きを同じうすると、而して此れは則ち其の風邪を伝へて、計ること其の右に出づ者なり。……凡そ妓の酒樓・船宿に招かれる者、其の身価を客に得る、一方金にして二百銭を謝と為す。二方にして四百、三方にして六百。船宿、肴を酒肆に取る者、亦二銖みして三百銭許を攫す。其れ既に諸を客に獲、復た諸れを妓に獲、

復た諸れを酒肴に獲。其の利幾許ぞや。之を獲る所以の者は、則ち一女將三寸ナメラカナルシタノサキの滑舌滑舌鋒のみ」(日野龍夫 同上、342～346)。

「橋の南、右折れば、同朋街たり。乃ち妓の巢窟。其の北にして裏岸、南にして広巷、櫛比して居る。街居、表裏あり。熱する者表に居り、冷なる者裏に居る。其の家たる、貧富の差有。然れども太だしく其の趣を異にせず。外に格子戸を掩ひ、内に方火鉢を安んず。桶潔にして塵なし。鉄の駕する攸、鉄瓶濯々たり。暖灰鶴々たり」(日野龍夫 同上、358)。「客の芳原に遊ぶ者、先ず柳橋に来たって飲み、妓を拉して北廓に赴き、一再宿する者亦多し。北郭の人、常に柳橋の妓の私事漸く盛んにして、我に害あるを憤るや、搗鼓・華燭を責むるの際、遂に其の制を立て、妓の舟行、客を送る者、僅かに山谷溝に至るを得て、郭に入るを許さずと云う。頃歳、北郭日々に冷に、柳橋日々に熱す。憎妬の積り、計此の若かくきに至る」(日野龍夫 同上、369)。

柳北は柳橋の隆盛を率直に観察しつつ、この土地に目撃されたもの全てを肯定することはしなかった。「嗚呼、人情の翻覆する、唯だ金のみ。金や能く痴けいを変じて慧と為し、醜を化して美と為す。故に聖人の易を説くに曰く、「乾を金と為す」と。又曰く、「乾道けんどう変化す」と。妙なる哉。其の象を取ればなり。金の利用、大なる哉。夫れ士にして禄あり、商にして業あり。豈に食うべきの粟あ、飲むべきの酒なからんや。而して故に市樓に就き、金を酒食に費やし、又妓に費やし、又婢に費やす。その費を知るべし。其嗜む所を食ふは可なり。其の愛する所に溺るは猶ほ可なり。而して耽湎の情、遂に其の愛する所を以て、其の愛せざる所の者に及ぼすに至る。笑うべきのみ」(日野龍夫 同上、349～350)。「均しく是れ娼妓なり。色を売って芸を売らざる者、俗に読んで女郎と謂夫。芸を売って色を売らざる者、呼んで芸者と謂ふ。往時

深川の妓は、即ち之を鬻^{うぐる}に通証書を以てして、色芸を兼ね売るを許す者なり。之を女郎芸者と謂ひて可ならん。柳橋の妓は、芸を売る者なり。而して往々色を売る者あり。何ぞや。深川の遺風あるを以て然るか。而して深川は則ち公に売り此れ則ち私に売る。公なる者は常にして為し易く、私なる者は変にして為し難し。是れ其の以て同じからざる所なり」(日野龍夫 同上、350～351)。「慶応以降、百貨の舗、皆其の産を半ば耗し、割烹家独り潤屋の富を擅にするは、何ぞや。府内の人口、其の半ばを減じて、遊客其の数を倍するの故なり。人口減じて遊客倍するは何ぞや。人びと、王花の美を楽しんで、後世子孫の計を為さず。一銭を獲れば則ち食ひ、一楮を獲れば則ち飲む故也なり。柳橋の酒楼、皆勢いを往日に殊す。河長・梅川、盟を橋の南北に争ひ、万八亦将に衰頹の氣を一振せんとす。亀清・柳屋、新境を新柳街に拓き、旗幟色を添ふ。蓋し新柳街球築一たび成って、柳橋の繁華益々加わる」(日野龍夫 同上、386)。

柳北にとって柳橋は、江戸という都市の醜悪、権力と金銭にまつわる醜悪を如実に示す「場所」であった。柳橋はまちががなく江戸・東京のアーバニズムが生み出したものであったが、柳北も静軒と同じく、アーバニズムに「徳」を認めていなかった。両者はアーバニズムの裏側にも目を向けていて、アーバニズムの裏側がもつ問題に批判的態度を保持していた点で共通する。

結語に代えて

都市的生活様式=アーバニズムは都市の成立と共に古い。都市はそこで展開される支配的な新しい生活様式を生み出した。都市の起源を求めれば、そこに、肉体労働と精神労働の分離をみだすことができる。肉体労働と精神労働の分離は社会的分業の発展を加速させ、新しい生活様式を生む要因となった。その傾向は都市の数が増え規模が拡

大するにつれ顕著になって行く。

すでにみてきたように、江戸期は都市の拡大を促しアーバニズムを顕在化させた時代であった。寺門静軒や成島柳北の描いたようなさまざまな新しい生活様式と新しい町を生みだしている。蔵前風という文化や蔵前という町はその代表であった(高村光雲 2007、31)。もちろん、江戸のアーバニズムは蔵前風の文化の生起にみられただけではない。江戸のアーバニズムを生んだのは消費と浪費の文化であり、ここでとりあげた静軒や柳北の世界を生み、柳橋という特異な空間を生みだした。ひとつの歴史的現象であった江戸のアーバニズムは、幕藩体制の社会構造を、延いてはやがて幕藩体制それ自体を変える圧力ともなったとみることができるのである。静軒、柳北は、共に、アーバニズムの台頭という新たらしい動きとそれを支えた新興勢力の動きを見のがさなかったがその動きに対してはもっぱら肯定的であったわけではない。むしろ批判的であった。静軒と柳北は幕臣でありながら幕藩体制には懐疑や失望の念を抱いていた。権力の基盤を町人に奪われ、支配に実態を失いながら遊興に浮かれている武士層とその武士層を支える経済的基盤に揺らぎを作りだす札差等悪徳商人に対しては好意の感情を持ちえなかった。そして、柳北についていえば、それ以上に、新しい支配者として江戸入りをしてきた薩長の田舎侍の振る舞いは許しがたいものであった。これは後の露伴や荷風にも見られる感情であった。対照的で、一見対立的にさえ見える露伴と荷風であるが、両者が江戸と江戸文化を高く評価していたという点で共通する。露伴も荷風も江戸と江戸文化への憧憬が強く、維新の政変で江戸が荒廃し変質していく姿、軽薄な西欧文化と薩長の侍たちの都には似合わない行動を嘆いている。柳北がアーバニズムにみたのは単なる生活様式の変化ではない。柳北はアーバニズムの背後に潜む「文化」の

腐敗と「権力」墮落をもみていたのである。「柳北は旧幕時代に禁じられていた高位高官のものの遊興が、維新政府によって寛大に扱われるようになったといい、そのところに旧弊を一新した王政の美のたしかなるしるしがあると指摘する。しかし、この言い回しには修辞学という黙説法（故意の言い落とし）が仕掛けられているわけであって、同時代の読者は、明治二年五月に新設された弾正台への痛烈な皮肉を読みとったはずである。『逢隈伯昔日譚』によれば、弾正台は維新政府の開明的政策に不満を抱く保守主義者の拠点で鰥寡孤独の救恤、孝子節婦の褒賞など、儒教的な仁政を標榜し、王政の美を明らかにすることを目標にしていたという。一方、政府高官の私行に厳しい観察の目をひかせたのもこの弾正台で、山内容堂・秋月種樹・後藤象二郎・大木喬任らが遊興を欲しいままにし、譴責ないし解職の処分を受けている。「天朝其の弊を矯め」以下の一文は、このように開明派と弾正台に結集した保守派との確執をめぐって、維新と復古の矛盾するふたつの顔をもっていた新政府の実態をあきらかにしているわけで、ここにあらわれているのはもっとも節約された量の中に多くの意味を暗示するアイロニーの洗練された効果である」（前田愛 1976、200～201）。柳北がみたアーバニズムは単なる生活様式の変化ではなかった。「成島柳北は、古い遊びの「型」が、幕末から明治にかけて失われて行く過程に、もっとも辛辣に観察を試みた文人であったが、柳北はその有力な一因が薩長武士の振る舞いにあると信じていた」（前田愛 同上、1～15）。「柳北の戯文の急所は、薩長の武士たちが普及させた酒席の新作法を、「王政復古」の戯画として描きだしたところにあるわけだが、じつはその背景には、江戸三百年の泰平が洗練させた遊びの形式を傍若無人に破壊してかえりみない田舎武士たちへの苦い怒りが込められている。・・・柳北は

彼の好んだ浅酌低唱のあそびのスタイルが、新政府の高官たちによって江戸の花街に持ち込まれた豪飲放歌の遊びのスタイルにとってかわられて行く現場に立ち会わなければならなかった。薩長武士の酒席の「新法」にたいして「常礼」の意味を説きあかそうとした柳北にとって、遊びは欲望の欲しいままの解放ではなく、ある洗練された型に欲望を飼いならして行く過程に外ならなかった」（前田愛 同上、17）のである。

アーバニズムは産業主義や資本主義とは独立した概念であるが、密接であることも事実である。とりわけ、アーバニズムの発展拡大にかかわるアーバニゼーションについては産業主義や資本主義において一層発展するからである。ゾンバルトは産業主義や資本主義とアーバニズムを峻別した上で、両者の密接な関係を指摘した（Werner Sombart 2012）。「奢侈は近代資本主義の発生を、各種各様の面で促した。たとえば奢侈は封建的な富を市民的富（負債！）に移行させるうえに、本質的な役割をはたした」（Werner Sombart 同上、245～246）。「奢侈の発展にとって意義深いことは、大都市が、明らかではなやかな生活を送る新しい可能性、それとともに奢侈の新形式をつくったことである。従来は王侯の宮殿内で宮仕えする人々だけが祝った祝祭が、大都市ができたおかげで広く住民層にもひろがり、彼らは、自分たちが規則的に享楽にふけることができるような場所をつくりだしたことである」（Werner Sombart 同上、221）。柳橋もそうした場所であった。

ゾンバルトの理解によれば、アーバニズムには、そもそも、柳北が求めるような「徳」が欠けていたのである。後の荷風もまたアーバニズムに懐疑的であった。「今や時代は全く変革せられたりと称すれども、要するにそれは外観のみ。一度合理の眼を以てその外皮を看破せば武断政治の精神は毫も百年以前と異なることなし。江戸木版画の悲

しき色彩が、全く時間の懸隔なく深くわが胸底に浸に入りて常に親密なる囁きを伝ふる所以けだし偶然にあらざるべし」(永井荷風 2010、13)。薩長の侍たちによる江戸の支配を苦々しく思っていた荷風であるが、それはやがて、薩長の新支配層を超えて外国文化の侵入に向けられる。「日本都市の概観と社会の風俗人情は遠からずして全く変容すべし。痛ましくも米国化すべし。浅ましくも独逸化すべし。然れども日本の気候と天象と草木とは黒潮の流れにひたされる火山の島嶼の存するかぎり、永遠の初夏晩秋の夕陽は猩々緋の如く赤かるべし。永遠に中秋月屋夜の山水は藍の如く青かるべし」(永井荷風 同上、23)と述べる荷風は、泰西の国々を模倣する日本を否定した。当然泰西の国々で支配的になるアーバニズムにも懐疑的であった。

寺門静軒と成島柳北。われわれはこの二人が江戸のアーバニズムに示した「思想」とアーバニズムが生んだ柳橋という「場所」に注目した。アーバニズムという生活様式の変化と思想が、社会の構造変動、さらには社会体制変動を導く要因として作用したことは記憶されてよい。アーバニズムは、徳川幕藩体制の崩壊と明治国家の形成へ、江戸から東京へという社会変動と首都移転にはたした一つの要因であった。「アーバニズムと社会変動」の視点には注目があってよい。都市の成長発展がアーバニズムの伸長をもたらし、それが新しい社会と文化誕生の契機となったことは洋の東西、時代を問わない。十八世紀のドイツでは都市の伸長がアーバニズム＝新しい都市的生活様式「読書人口の増加」をもたらし、従来の「集約的読書」(人は一生の間に繰り返し一冊の本を読んでいた)のスタイルから「多読型読書」が始まったという(阿部勤也 1998、165)。アーバニズムが古いものの解体と新しいものの創造を内包していたという事実は注目されよう。

最後に、現代のアーバニズムについて一言ふれておくことにしよう。鈴木広は現代のアーバニズムについて「環境の劣化が内在化して身体劣化を不可避なものとし、この傾向率に照応して精神の劣化たるイデオロギーが優勢となる。このように総括できるのが、21世紀へ踏み出そうとする先進社会の生活様式を尖端的に集約しているアーバニズムの具体的内容である」と述べ、現代のアーバニズムが「危機」を内包することを指摘する(鈴木広 1998、348)。もちろん、江戸のアーバニズムに関心を寄せた静軒と柳北ではあったが、現代のアーバニズムがもつ深刻な問題まで透視していたわけではない。しかし、アーバニズムには、生活様式を変え文化の解体・創造を導くという点で通底するところがある。アーバニズムは、その功罪を合せて、もっと多面的・多元的に論じられてよい。

引用文献

- Gelfant Blanche Houseman Gelfant, *The American City Novel*, University of Oklahoma Press 1954.
 = 岩本巖訳『アメリカの都市小説』研究社出版 1977
- L. Wirth, *Urbanism as a Way of Life*, A. J. S., vol44, 1938
 = 高橋勇悦訳「生活様式としてのアーバニズム」(鈴木広訳編『都市化の社会学』誠信書房 1978)
- Werner Sombart, *Liebe, Luxus und Kapitalismus*, 1922
 = 金森誠也訳『恋愛と贅沢と資本主義』講談社学術文庫 2012
- 阿部勤也『物語ドイツの歴史』中央公論社 1998
- 荻生徂徠『政談』岩波書店 2008
- 鈴木広「都市社会学の現代的課題－災害分析から環境対応へ－」鈴木広編『災害都市の研究－島原市と普賢岳－』九州大学出版会 1998
- 高村光雲『幕末維新懐古談』岩波書店 2007
- 瀧川政次郎『長谷川平蔵－その生涯と人足寄場－』中

公文庫 1994

辻善之助『田沼時代』岩波書店 2009

永井荷風『下谷叢話』岩波書店 2000

永井荷風『江戸芸術論』岩波書店 2010

成島柳北 塩田良平校訂『柳橋新誌』岩波書店 2001

野村兼太郎『江戸』至文堂 1966

日野龍夫校注『江戸繁昌記・柳橋新誌』新日本古典文学大系 100、岩波書店 1989

前田愛『成島柳北』朝日新聞社 1976

吉田伸之『成熟する江戸』講談社学術文庫 2009

なお、本論の執筆に当たっては、永井啓夫『寺門静軒』（理想社 1966 年）より多くの示唆を得た。